

記録管理学会の紹介

山崎 久道
記録管理学会

はじめに

記録管理学会は、記録管理の普及と記録管理学の発展のために活動しています。記録管理に関心のある方ならどなたでも入会できます。

会員には企業・団体等のレコードマネジメント専門家、記録管理機材や記録管理システムの開発・提供を担う人々、公的機関や企業の記録管理に関わるコンサルタント、記録管理や図書館・情報学の研究者、公文書館等アーカイブの実務者などさまざまな分野の方から構成されています。研究大会や例会は、さながら、情報・記録・情報システムに関わる異業種間交流の場ともなっています。

学生会員の制度も設けています。学生のうちに会員になり、この分野の仕事のおもしろさを知って、関連企業に応募・就職する例もあります。

当学会の設立の趣旨

当学会は、1989年3月に設立されました。その目的とするところは、「記録の重要性を認識し、記録に関し人間がどのような行動を選択す

るかということを経験的に解明し実践的要請への対応を図ること」です。設立趣意書には、以下のように書かれています。

記録管理学会設立趣意書（抄）（1989年3月18日）

記録することによって情報と知識を伝承することが出来るようになったとき、人類は他の脊推动物と明確に異なる道を歩み始めました。文字および紙の発明はそれぞれ記録の精度と流通を高めて情報と知識が時間と空間を超えて伝承する方法を拡大し、グーテンベルク革命はその流れを急激に加速して人類による過去・現在・未来の対話を増大させました。そして、情報技術革命により大量の情報と知識が多様な媒体に記録されているいま、記録の重要性を認識し効果的に管理して新たな情報と知識を創造し人類の記憶の宝庫の豊かな伝承をはかり、これによって社会の進歩と発展に貢献する必要性が高まっています。

記録管理は記録を作成または収集し、加工・蓄積・組織化し、検索方法を整備して活用し、最終処置（破棄または永久保管）するという記録のライフサイクルを対象として統合的な管理をはかります。これらの対象となる記録には組織のエネルギーが込められており、組織知能の基盤となって明日への情報と知識を創造する可能性を抱いています。記録管理の適切な運用により、仕事の効率向上や対費用効果の増大に加えて、未来への夢を紡ぐ道を開くことができるのです。（以下略）

山崎 久道（やまざき ひさみち）

中央大学文学部教授（社会情報学専攻）。東京大学経済学部卒業。（資格）博士（情報科学）東北大学、情報処理技術者システムアナリスト。（経歴）(株)三菱総合研究所、宮城大学事業構想学部教授を経て現職。

この趣旨は、現在の活動にも活かされています。

昨年末現在の会勢は、正会員などの個人会員223名、機関団体・賛助会員22団体です。運営については、会員から選出された理事が、理事

会を構成し、1～2ヶ月に一度の割合で理事会を開催して、お互いに敬意と信頼感を抱きつつ、真剣に討議し、会の意思決定をしています。各理事は、それぞれ担当分野（「理事の機能分担」と言っています）を持って、業務の企画推進に、中心となって当たっています。役員の職務は、ボランティアですが、各自がこの学会に愛情を持って、会員の利益と会の発展を願って、熱心に取り組んでいます。現在の理事は以下の通りです。

（会長）山崎久道（副会長）小川千代子（事務局長）荒俊樹（理事）森井晃彦、関野陽一、松本優、松山栄二、石井幸雄、八重樫純樹、村岡正司、西川康男、船越幸夫（順不同）

定例活動

学会の定例活動としては、以下のようなことを行っています。

1 総会開催

年1回開催し、活動の報告と承認を行います。学会表彰の授与、助成研究の成果発表〔該当研究があった場合〕も同時に行います。

2 研究発表大会開催

総会に併設する形で、年1回開催し、特別講演、会員を中心とする研究発表、その他の発表を行います。開催地は、原則として、首都圏と関西地区で、毎年交互に設営しています。2010年は、来る5月14日（金）午後から15日（土）午後にかけて、大阪大学中之島センターで、大会テーマ：“時をつなぐ私たちの記録文化の創造をめざして”の下に開催します。

3 学会誌『レコード・マネジメント』の編集・発行

会員等の研究論文その他の主に学術的な成果・記事を掲載しています。査読付きです。

4 ニュースレター『RMSJ News Letter』の編集・発行

会員へのお知らせ、行事の案内と報告、会員の日常活動の参考情報の案内、その他会員への

情報提供を目標として、発行しています。

5 例会の実施

講演会、見学会などを内容として開催します。首都圏と関西でそれぞれ独自に実施しています。

6 Webサイトによる広報

会の活動全般の案内をおこなっています。ニュースレターや学会誌と連携して、相互補完的、必要な場合は重複して情報を提供しています。会員及び一般の人たちへの情報提供活動と言う位置づけです。

URLは、以下の通りです。

<http://www.soc.nii.ac.jp/rmsj/>

7 研究支援活動

以下の2種類の活動からなります。

(1) 研究助成金制度

年1回、会員から研究計画を提出してもらい、応募研究の中から審査の上、優秀と認められ、学会として助成することがふさわしいものを1、2件決定し、助成を行います。助成研究を受けた者は、前述した総会の席上、その成果を口頭発表します。

(2) 学会表彰

記録管理分野ですぐれた業績をあげた人を表彰して、この分野のいっそうの発展と深化を祈念する意味で、「記録管理学奨励賞」（若手研究者の優れた研究業績を顕彰）、「記録管理業務奨励賞」（実務家の記録管理への地道な貢献を顕彰）の表彰を、毎年交互に行っています。また、記録管理分野で、とくに顕彰すべき事案がある場合に、「記録管理学会特別賞」を授与しています。最近では、「公文書管理法」の制定に向けて、現場感覚を活かして尽力された上川陽子元公文書管理担当相を表彰しました。

8 関連団体との連携・協力

記録管理やアーカイブズ分野に対する社会的認知度とその内容を向上させることが必要で、そのためには機関の垣根を越えた連携が必要だと考えています。

例えば、「アーカイブズ関係機関協議会」へ

継続して参加したり、昨年7月に東京ビッグサイトで行われた「Next Documentソリューション2009」に出展するなどしています。

プロジェクト活動

定例活動とは別に、記録管理分野のその時々課題や、学会員の関心を集約する形で、プロジェクト活動を実施しています。最近では、「企業の文書管理実態調査」「文書管理法（仮称）制定推進プロジェクト」「文書管理専門職養成に関する研究会」などのプロジェクト活動を行っています。プロジェクトで得られた知見や結論は、「提言」「提案」「意見書」「報告書」の形で発表しています。また、研究大会で発表し、会員間で議論して彫琢したものを学会誌に投稿する場合もあります。

現在は、「社会基盤としての中間書庫のあり方に関する研究会」（座長：小谷允志）が活動中です。このような実務的テーマによる研究、あるいは研究から派生した政策提言は、当学会を特色づける活動の一つです。

研究の方向性

ここで、最近の当学会の研究の方向性を見てみましょう。そのために、2000年以降の記録管理学会の研究大会での発表（基調講演、特別講演を含む）70件のテーマを、内容分野別に分類してみると、表のようになります。

表 2000年以降の記録管理学会研究大会の発表テーマの分類（合計70件の内訳）

大分類	中分類	発表件数
情報・記録管理についての思想と枠組み (19件)	情報、記録管理の総合的検討	15
	情報共有の方法	4
システム構築と運用 (15件)	データベース構築	2
	記録管理システム	2
	アーカイブの作成とアーカイブズの運営	5
	情報収集とサービス	6

記録管理の経営的課題 (9件)	保存の技術的・社会的課題	3
	人材育成	3
	規格・標準	3
各分野の記録管理 (27件)	行政における記録管理	15
	企業における記録管理	7
	教育・研究と記録管理	5

この表から見ると、以下のような傾向が窺えます。

- (1) 各分野における記録管理の分析と実践例などが、全体の4割に及んでいます。これは、実務経験者が多いという当学会の特色を反映しているものと思われます。
- (2) その中でも、「行政における記録管理」に関わる発表が多いのは、この期間に澎湃として巻き起こった、情報公開（を実質的なものにするための文書管理への注視）、市町村合併（による文書散逸の危機）、公文書管理法（制定への胎動）などの大きなトピックが、研究や発表への意欲を刺激したという面がありそうです。
- (3) しかし、記録管理全体を捉えて考察する「情報・記録管理についての思想と枠組み」も、全体の2割強と「健闘」しています。やはり、本質的なものへの希求と憧れが、学会員を衝きうごかしているということなのでしょう。
- (4) 企業における記録管理についての発表は、2006年の研究大会を除くとやや低調です。これは、企業秘密の壁や企業活動の中での位置づけが難しい、などの問題があるのかもしれませんが、しかしながら、情報処理方面でこのテーマが扱われるときは、ほとんどシステムの問題に帰してしまうのを見ると、当学会がもっと積極的に取り組むことが必要だと思います。
- (5) 「記録管理の経営的課題」も、やや少な目のようです。気になるのは、記録保存のコスト（社会的コストを含む）を扱う発表がほ

とんどないことです。国・自治体や企業を取り巻く現下の厳しい経済状況の中で、記録管理の価値を人々（特に財政当局の）に訴えるには、費用対効果の分析は不可欠だと思います。この面での、野心的な試みがでてくることを期待しています。

将来を見据えて

今年2月のはじめ、日本の機械メーカーが、航空機の座席のテストデータを改竄していたと報道されました。座席製造の過程で、耐火性や強度などの検査記録を改竄したり捏造したりしたそうで、件の座席は、すでに1000機に納入されているそうです。事実なら、航空機の乗客の安全にかかわる由々しき事態です。

これまでも、電力・原子力、製鉄・機械、製薬などの企業で、同様のデータ改竄が起っています。食品の製造年月日データやマンションの耐震強度データの改竄などの事件は、いずれも記憶に新しいものです。

問題を起こしたのは、ほとんどの場合、わが国を代表する有名企業です。さらに、驚くべきは、大学などの教育・研究機関、または年金を扱う役所でも、こうしたことが起っていることです。こうなると、一部の問題組織が起こしたというより、日本の「お家芸」かと、自嘲したくもなります。

こうしたことの原因には、納期厳守の要請、失敗を隠そうとする組織人の保身願望、記録管理システムの未整備などの諸問題が、複雑に絡み合っているように思います。しかしながら、最も根本的な問題は、これらの人々の心にある「記録への軽視」でしょう。それは、「過去を直視しない国民性」の裏返しでもあるのです。

ドイツの文豪シラーは、「現在は、矢のように飛び去り、未来はためらいがちに近づき、過去は、永遠に静かに立っている。」と言っています。わたしたちは、「正しい」記録や文書を通じて、過去に対する「恐れ」と「愛おしみ」

を持ち続けなければならないのです。

私たちは、こうした「記録管理の精神」を、学会活動を通して、広く世の中に普及させて行きたいと念じています。「日本国民の良心」を組織として体現したとも言える国立公文書館を先頭に、こうした思想が社会を席卷する日の近からんことを念じて、拙稿を閉じさせていただきます。

(文中敬称略)



(著作、論文) 専門図書館経営論；情報と企業の視点から 日外アソシエーツ 1999
Changing Society, Role of Information Professionals and Strategy for Libraries
IFLA Journal Vol.33 No.1 (2007)

その他多数。

(専門領域) 情報組織の経営、データベース、インデクシング、情報ストックの研究。

(E-mail) hyama@tamacc.chuo-u.ac.jp